

汚名

小杉健治

汚名

小杉健治

汚名おめい

一九八八年一〇月二五日 第一刷発行

定価 一、一〇〇円

著者 小杉健治こすぎんじ

装丁 田村義也

発行者 若菜正

発行所 株式会社集英社

〒一〇五 東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇

出版部 (〇三) 二三〇一六―一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

汚
名

七月三十日。午後になって雷鳴がとどろき、一転して黒い雲が空をおおった。いきなり、はげしい雨が降り出した。

江戸川土手沿いにある阿倍野鉄工の工場の敷地には、ふりそそいだ雨が洪水のように流れていた。阿倍野鉄工の玄関ロビーにはガラスケースが並んでいて、その中に社の製品が陳列されている。金属製の化粧品容器加工用や各種プレス用金型などであった。

この日、阿倍野鉄工を都労働委員会の委員三人が工場視察のために訪れていた。彼らの案内をしているのが、専務で総務部長を兼任している阿倍野哲二であった。

阿倍野哲二は阿倍野吉道社長の次男で、四十五歳。柔道の有段者で、がっしりした体格であった。そのぶん、態度も横柄な感じであった。声も大きい。

労働委員会の委員は、応接室で阿倍野哲二の話を聞いてから、工場へ向かった。阿倍野哲二は、専務の肩書ではなく、労務担当の総務部長として彼らの視察に立ち会っている。

工場の入口のところで、女子事務員が労働委員のひとりずつにヘルメットをわたした。白いヘルメットで、まわりに黒の一本線が描いてあるのは来客用だという印である。

阿倍野総務部長のヘルメットは赤と青の二本線が入っており、ヘルメットの正面に、哲という字が赤で書いてあった。彼専用のヘルメットのようなだった。

工場は二つに分かれており、第一工場は溶接などの組立加工部門、第二工場は、プレス加工部門であった。

薄暗い工場内で、黙々と工員が働いている。ベルトコンベアーに向かって作業員が並んでいた。部品のチェックをしているのか、色白の顔の長い女性が、じっと、流れる部品を凝視していた。彼女の顔からうっすらと汗がにじんでいた。この工場で働いているのは、体の不自由なひとたちだった。

阿倍野鉄工は、従業員二百三名のうち、百二十一名が身体障害者や知恵遅れのひとたちであった。二十年前から障害者の雇用をはじめ、数年前には「福祉モデル工場」としてマスコミの話題にのぼったことがある。

ところが、つい二カ月ほど前、阿倍野鉄工労働組合から、不当労働行為で労働委員会に提訴があったのである。阿倍野鉄工は障害者の酷使、差別、搾取を続け、ドレイのようになっていくという内容だった。

委員会では実情調査に乗り出し、会社側と組合側から事情をきいたが、双方の言い分は大きく異なっていた。

組合側の訴えは、

「障害者を月のうち二十日ぐらい深夜労働をさせ、一日十四時間もはたらかせている。賃金も低いうえ社内預金の名目でさらにひかれてしまう」

というもので、これに対して会社側は、

「忙しいときは残業してもらうのは当然。それは障害のある方だろうが、健常者であろうが同じ。賃金にかんしては、健常者となんら遜色はない。社内預金は、彼らの将来のためにしていることである」

と、答えている。

たしかに、会社側から報告された賃金をみると、健常者と障害者の収入に大きな開きはないが、それは見かけだけで実情は、障害者は残業や徹夜をしたぶんを含んだ収入であった。

また、組合側の訴えのなかには、女子障害者に対する会社幹部のワイセツ行為のことがふれてあったが、この件にかんして、会社側は全面的に否定している。

そして、最近、会社が導入した産業用ロボットの件が問題になっていた。これは、障害者を中心とした組合の力が強くなってきたから、いやがらせに導入したのである。つまり、いやならやめろ、という威しである。クビになったら働き口がないという障害者の社会的立場の弱さにつけこんで、威しをかけているのだという訴えであった。

これに関して、会社側は、産業用ロボットは生産の効率をあげ、さらに障害者の作業負担を軽くするために導入したのだと反論した。

こういう経緯があつて、今回の工場視察となったのである。

第二工場に行くと、プレス加工の大きな機械が並んでいた。機械のまわりには、ヘルメットをかぶった人間が忙しそうに動きまわっていた。

その中でひととき目をひいたのが、産業用ロボットであった。円筒型で、長い腕を持っている。その腕が自由に動いてベルトコンベアーから流れ出た製品をつかみ、プレス加工機に運んでいる。

「日東製作所製の最新鋭の移動型ロボットです」

阿倍野は都労働委員の三人に説明した。

「ごらんのように、危険な作業を人間の代わりにロボットにやらせているのです。そのぶん、従業員にはほかの新しい仕事をしてもらっています」

阿倍野は胸をそらした。

産業用ロボットというのは、塗装用・溶接用に使われているように、機械のアームが上下左右に動いたり、あるいは回転したりして、作業をすすめる機械であった。したがって、いかにも機械というイメージであったが、マイクロエレクトロニクスの発展により、小型のコンピュータ、すなわちマイクロプロセッサを内蔵し、さらに、視覚や聴覚などの人間の感覚器官に相当するセンサー技術の発達によって、より人間に近い知能ロボットが開発されてきた。

利用面においては、元来、人間にとって危険、過酷、単調な作業を肩代わりするというのが産業用ロボット利用の目的であったが、最近では、新しい生産システムとして工場の無人化のために使われるようになった。そのために、産業用ロボット導入による雇用面での問題も出てきている。

阿倍野は制御席にすわっている作業服姿の男に、ロボットを停止させるように命じた。男の胸のネ

ームプレートには石倉と書いてあった。

阿倍野が停止したロボットに近づいた。そして、ロボットの正面に立って説明をはじめた。

阿倍野の説明が続いた。都労働委員も興味深げに、ロボットをながめている。

阿倍野は得意そうに、さらにロボットに近づいた。外では相変わらず雷鳴が轟いている。

阿倍野がロボットの正面に顔を向けたとき、委員のひとりが妙な声を出した。停止していたロボットがいきなり動き出したのである。

ロボットの腕が横から伸び、阿倍野の側頭部を殴った。彼は大きくはねとばされ、壁に叩きつけられた。ロボットの動きは素早かった。

周囲にいた人間はなにが起こったのか、判断できなかった。

阿倍野は長いアームでおさえつけられ、壁に押しつけられた。口から奇妙な声があがった。阿倍野は壁に押しつけられて、ぐったりした。

オペレータの石倉がハンマーを持って、ロボットに殴りかかった。何度もハンマーを振り下ろし、やっとロボットの動きが鈍くなった。しかし、阿倍野の体はぐったりしていた。

救急車が到着したときには阿倍野哲二は事切れていた。

小岩北署の今川警部補が阿倍野鉄工に到着したときは、あれほどの雷鳴と豪雨もやみ、青空がのぞいていた。そして、再び、気温が急上昇した。

今川の事情聴取にたいして、石倉が興奮をおさえて訴えた。

「停止していたロボットに、専務が近づいたとき、急にロボットが動き出したのです」

石倉守は二十九歳で、いかにも東北出身らしい純朴な感じの青年であった。今川は、相手の気持を刺激しないように、静かにきいた。

「なぜ、動き出したんですか？」

今川は、ロボットのことはよくわからない。坂道に駐車中の車が突然動き出してひとをはねたという事故には立ち会ったことはある。ロボットというのは、それと同じなのだろうか、と今川は考えながらきいた。

「わかりません」

石倉は唇を震わせながら答えた。

今川は、次に都労働委員会の委員にも訊ねたが、石倉の証言とだいたい一致していた。

メーカーである日東製作所からかけつけた技術主任の谷山は、

「オペレータの石倉さんの話だと、ロボットの作動スイッチだけ切って、メイン電源は入りっぱなしだったそうです。考えられることは、ノイズ、すなわち異常信号を察知し、ロボットが動き出したのだと思います」

「どこから異常信号が出たのですか？」

「雷です。さっきまで稲妻が走っていましたね。その影響で、ロボットがノイズを拾い、停止中にもかかわらず突然、動き出したのではないかと……」

谷山は眼鏡の縁に手をやって、考えながら答えた。

数日後、今川はロボットについて、丁大学工学部の教授から話をきいた。

「産業用ロボットの導入効果はたしかに大きいが、その反面、安全性の問題について改善すべき課題は多い」

と、教授は言った。

「なにしろ、ロボットは鉄の腕を持っていて、そのパワーは大きく、自由に動くことができます。一度、誤動作すれば危険このうえない代物です」

教授はロボット事故の事例を持ち出した。

「昭和五十六年七月、川崎重工業明石工場で作業員が作業用機械とロボットの先端部に胸部をはさまれて死亡するという事件が起きている。そのほか、死亡事故にいたらずとも、ロボットの腕が人間の体につかって打撲傷を負ったり、ロボットの調整中に、ロボットのアームが誤動作して頭に怪我をしたという事例がみられます」

「その原因というのは？」

「ふつう、ロボットが作動している工場は無人化されているケースが多く、事故発生時、目撃者のいないことが多いですね。川崎重工業の事故でも、たまたま通りかかったほかの作業員が事故を発見したのですから。ただ、事故の原因として、マイクロプロセッサのプログラムの誤りや、マイクロプロセッサに入ってくる電気信号ノイズなどが考えられます」

今川は教授の話をきいて、一つだけ気にかかることがあってきき返した。
「プログラムの誤りというのは？」

「文字通り、人為的なミスですよ」

今川は、日東製作所に出向き、ロボットプログラムの開発担当者に会った。

「絶対に、プログラムミスということはありえません」

彼は青い顔で訴えた。

「こんなことで、ロボットを危険だと思われたら可憐いけません。ぜったいに、プログラムミスでないと証明してみせます」

メーカー側は原因追及に全力をあげると言ったが、警察は、ロボット事故の責任をメーカー側に求める判断をした。

第一章

1

九月になって、やっと秋らしくなった。澄んだ大気に身も心もひきしまるような感じであった。

土曜日の昼下がりのせいか、公園に大勢の人がくり出していた。残暑からやっと解放され、生命の活気をとりのどしたように、のびのびとしている。

公園はそれほど広くないが、中央に池があり、鯉が泳いでいた。その池のまわりに、ベンチがならんでいる。

折原章一は、二日酔いの頭をかかえながら、アパートから歩いて十五分ほどの公園に足をのばした。ひょうたん池のくぼみのところにあるベンチが彼の指定席だったが、その日はあいにくアベックが先に占有していた。しかたなく、彼は反対側のくぼみまで足をのばした。

反対側は樹木が少なく、散歩する人からもまる見えなので、あまり落ち着かない。彼は木陰にある

ベンチに腰をおろした。秋の照り輝くような陽差しが、池の水面に反射して輝いていた。

とくに、特徴のある公園ではないが、鬱蒼とした樹木の間から太陽の光がもれてくる光景を、彼は好んだ。それに荒らされていない純粹なところがあった。すこし考えごとをしたいとき、たいていこの公園にやってきて、ベンチに腰をおろす。夏の間でも、木陰に入ると涼しい風が吹き、のんびりできるのだった。

が、その日の彼は気持がしずんでいた。その気持をなぐさめるつもりで、公園までやってきたのだ。昨夜は、上司の森岡部長代理に誘われ、明け方まで呑んだ。池袋のすし屋で、森岡からコンピュータ・ソフトの外販中止の話を聞いたのである。前々からうわさされていたが、ついに正式発表があったのである。森岡は顔を真赤にして、

「会社は俺たちの心情をまったく無視している」

と、荒れていた。折原も会社側の一方的措置に納得いかなかった。ふたりで、会社に対する不満を酒を呑みながらぶつけたのだ。池袋から新宿に出て、明けがたまで呑んでいたのだ。

関東電工エンジニアリング事業部の情報管理部の開発グループは、十年近い年月をかけ、コンピュータによる自動設計製図システムを完成させた。立体図や側面図などの基本設計図をコンピュータに記憶させ、工事規模に応じた条件を与えることによって、最適な配線工事設計図を描き出すソフトウェアである。

このソフトウェア開発の企画および開発の実質的なリーダーが森岡であった。森岡はT大工学部機械科卒で、関東電工におけるコンピュータの第一人者であった。折原もT大工学部機械科卒で先輩後

輩の間柄から、森岡に面白いがられ、入社以来、森岡の下で働いてきたのである。森岡はどちらかというと企画能力に優れ、折原は森岡の考えたことを具体的にプログラム化する能力にたけていた。いわば、ふたりのコンビが中心となって、この自動設計製図システムが完成したといってもいい。折原は森岡より十歳も年下の三十二歳だが、森岡には絶大なる信頼を得ていた。

森岡は自動設計製図システムを外部に販売しようとした。これと同じシステムを他社が開発しようとなれば、多額の開発費を要する。それに技術的にみても、関東電工が開発したシステムより優れたものができるかどうか疑問だ。それならば、関東電工で開発したシステムを安く買ったほうが得というものである。

これまでも、いくつかの小さなシステムを外部に販売してきた。当然、今回も何の問題もないはずだったが、会社はその外販禁止を決定したのだ。

池のほとりで子供たちが遊んでいる。心を落ち着かせようと思っても、いつの間にか会社のことを考えていた。

「関東電工のノウハウを競争会社につかわせることはない。また、企業機密がもれる危険性がある」という新社長の一言がたぶんに影響しているが、それと、もう一つ、関東電工情報ネットワークシステムを構築するというプロジェクトのせいであった。本社の大型コンピュータを中枢にして全国十三カ所の工場、および関連会社のコンピュータをオンラインで結び、技術情報管理から資材管理、さらには利益管理などの一大ネットワークの構築作業をすすめていたが、大幅な遅れを来し、そのてこれのために、メンバーを増やすことになったのである。その増やすメンバーは自動設計製図システム

の開発にたずさわった人間が対象となったのである。つまり、折原たちは、そちらのプロジェクトの応援にかりだされることになったのである。

しかし、自動設計製図システムもまだまだ拡張する余地がある。この開発にくわわった技術者は、最後までやりとげたいと思うのが当然な気持なのだ。それを中断させられるのである。外部販売を中止するということは、これ以上、このシステムの開発を行わないということである。

ゆうべ、森岡が「会社は俺たちの心情をまったく無視している」と言った意味は、こういうことであつた。

森岡は、自動設計製図システムの開発で社内では羽振りをきかせていたのだ。コンピュータの第一人者というプライドがあつた。それが、部下をこつそりもっていかれてしまったのだ。手足をもぎとられてしまったと同じである。そればかりではない。森岡は外販を前提に、自動設計製図システムを購入するユーザの根回しをしてあつたのである。三社ほどにシステムを販売する約束になっていたのだ。それが突然の中止で、たとえ会社の方針変更とはいえ、森岡はユーザに対して嘘をついたことになる。森岡の信用は丸つぶれであつた。関東電工におけるコンピュータの第一人者を自他ともに認める森岡にとっては、屈辱的なことであつた。

陽はすこしかたむいていた。

折原がベンチでため息をついていると、額の辺りに強い視線を感じた。顔を横に向けると、池のほとりに立っている男が、じっと折原のほうを見ていた。背の高い男だった。チェックの派手なブレザーを着て、くびにはアスコットタイを巻いていた。サングラスをかけているので、人相がよくわから